相原中央公園にて桜を植樹している様子。

地域活動に携わるきっかけとは何だったのだろうか。

桐生：大学を出てテレビCMなどを制作する会社に就職しました。東京のビル街の真ん中で真夜中まで仕事をして、夜中にタクシーで帰る生活を続けて数十年。リタイアした後、地元の仲間に誘われて地域活動を行うNPOに参加し始めました。

安達：私は建設関係の営業の仕事をしていたころ、入っていた町内会の役員になってくれないかと誘われました。当時は仕事も忙しく一度お断りしたのですが、再び誘われて…。とにかく役員のなり手不足が深刻で危機感を覚え、立て直すことにしたんです。そうこうしているうちに地区連合の会長になり、今に至ります。

桐生：町内会活動に参加すると、人とのつながりが自然にできますよね。役員となると最初は面倒だと思うけれども、そのうちにまあいいかとなって。こんなことしたらどうかなんていうアイデアも、地域の人との会話の中から生まれてくるし、お祭りなどで自分の仕事を活かして何かすると便利がられる。そういう楽しさがあります。

安達：お金では買えない醍醐味ですよね。

永島：私はもともと人の心に興味があり、大学では心理学を専攻しました。その後歌手活動をしていたのですが、そのときもお客様の心にどう訴えるか、心と心の対話みたいなものを常に意識していました。それが転じて人の心にアプローチできる作業療法士になったというのもあります。作業療法士の仕事は、どうしても医療や介護関係の人との関わりが多くなりますが、いろいろな考えを持った地域の方たちと関わると自分自身のアイデアも膨らみますし、何より楽しい。そこにやりがいを感じています。

高齢者の移動を支援するくらちゃん号。

一方、地域で活動を続けていく上での課題とは。

永島：資金面が課題です。鞍掛台の買い物・外出支援では、車の運転手や燃料費は事業所から提供してもらえるのですが、バス停などのメンテナンス費用をどうやって捻出するかという問題に直面しています。地域の皆さんにも相談しながら活動を続ける方法を模索しています。

桐生：やはり活動の継続が難しいです。継続させるための予算と携わる人のモチベーションの維持が課題ですね。

安達：確かに人材確保は本当に難しい。町内会でも、役員の順番が回ってくると退会してしまうという人が多いのが実情なんです。皆で知恵を出し合って続けていきたいですね。

資金や人材確保という課題に直面しながらも、着実に歩みを進める３人。最後に、今後への思いを聞いた。

永島：すでにいくつかの地域にも広がっていますが、地域の方々が中心となって、地域の移動を支える取り組みが、いろいろな所で行われるのが夢です。公共交通、コミュニティバスが行き届かないようなローカルな部分の外出を地域で支えていく取り組みが増えて、行きたいところに行く、会いたい人に会える、やりたいことをやれる、そんな世の中になるといいなと思います。

桐生：今、相原を考える検討委員会というのをやっていて、いろいろなアイデアを持った人に出会っています。私が取り組んでいる相原の名所づくりを充実させて、次代の人たちに引き継いでいきたいと思います。

安達：素晴らしい取り組みを継続するには、次の世代の人達にバトンを引き継いでいきたいです。〇ごと大作戦で見た夢のつづきを、大いに楽しみにしています。

小山にある三ツ目山公園。春は、菜の花と桜が咲き誇る。